

一九六六年（五六歳）

一月一日

六五年をひらく。初老に、はいりかけた身体で左の胸に結核をいだいてはけさの凍結はこたえる。子のない二人だけの、さびしい元日である。

一月七日

医局看護婦長看護婦主任の会議をひらく。看護婦不足対策をねるが、妙案は出てこない。でる筈はない。

一月二十八日

寝台のところに来てびっくりした。となりの席に人形劇の土屋さんがいたではないか。ビュッフェにゆきビールをともにしながら、芝居、とくに人形劇のことについて話をきいた。そしてすばらしいことを思いつき、それを土屋さんに話し、激励された。それは精神病棟に入院している患者さんに人形をいじらせることであつた。早速実施してみよう。

五月十六日

かんべんしてくれ、こんな日が何日もあつてたまつたものでない。午前中に五九人、午後は一二人と外来診療。そのなかには胃のレントゲン検査一人、高血圧の精密検査三人、往診ひとりがまじっている。

そして六〇人から入院患者を回診する。それに昼は昼で会議が三つ。野坂参三を迎える実行委員会と次の日曜日に開かれる病院総会の相談と党の会議を。

夜、飯の膳から大森へ移動診療にゆき、一八人を診療し農民体操をやり、衛生講話をし、県会報告をやつた。

妻が私のからだを心配してくれるのも無理はない。生きてよかつた、生き甲斐があつた。そんな一生にするには、これからである。

いままでの五六年、生き甲斐のあるものがひとつでもあつたとすれば、働く人の側に立つたことである。

土台、立場、方向、それがやつとできたばかり。そこに何をきずき、そこに何をもち、そこで誰とすすむか。それこそこれからのことである。

私の家で夜、看護主任会議をやる

五月三十日

午後アルコール学会発起人会。アルコール学会の設立に京都に来たはいいが、そのあとの懇親会に私たち発起人は二〇余人、でてきた舞子二五人、芸者衆は一五人。脂粉のにおい、表情のない人形顔。嘔気ばかりして、ビール三、四杯で町に出てゆく。

九月五日

議場に入る。会議が決定され、議事録署名者が指名され、毛内議長はにわかにかたい表情になり私の方をむく

“いまから津川武一君に戒告を行います。十三番津川武一君の起立を求めます、
毛内議長の声はいくらかふるえている。私は腕をくみなおし、いつものように、にやにやしているだけ。勿論立つ筈はない、私は戒告をうけるようなことをしたおぼえはない。自民党はいたいところをつかれ、それをかくすために私を懲罰にしてくただけである。前の県会の際のことである。弘前と青森の党の人や労働者や市民や病院の人たちが毛内議長や自民党県議団に抗議の波をかけ、ついに施行しえなかった懲罰をいまの臨時県会でやろうとしてきたのである。あの大水害のあとの始末をなにより優先して一時間でもはやく討議決定しなければならないのに、大鰐の被害者たちがバスをとってやってきた。水害救済の陳情にきて、傍聴席一杯になり、水害救済対策がいかに提案され、いかに討議されるかを彼らの目と耳でたしかめようとしているのに自民党の討議を背におっている毛内議長は

“津川武一君の起立を求めます、

と再び申したててくる。私は勿論立たない。

“津川議員の起立を求めます、

議長は三回申したてる。私はそれでも立たない。議場はしーんとなる。テレビカメラは私をとらえる。議長はきまりわるそうになにか紙片をいじっている。何秒かがつづく。

“暫時休憩します、

そういう議長の声は尻きれである。

議長の命に従わなかったとの理由で私の再懲罰動議が提出され、私の登院停止二日が共産党社会党の反対をおしきって決定される。午後五時半のことである。大鰐水害救済陳情の人たちは自民党のやり方をいきどおって帰って行ってしまう。

私は六時のバスで帰る。バスの窓のかなたに岩木山がまだ見えている。その上の空はあかねである。あすは天気である

十二月三十一日

病院としては大変な年であった。民主化をつよくおしすすめ、その保障として理事長と病院長をかねることになり、厚生年金の融資で病院を改築する方針をかため、野田地域に一八〇〇坪の用地を買いとった。

一九六七年（五七歳）

七月十六日

私が心のうたごよみの一集二集で母をうたってあるのをみて、母はじっとしておれなくなつた。長子武一がその気なら母も息子についてなにか書いてみたいというのである。母は印刷屋に来てもらい、いまから武一のことをしゃべるから本にしてくれと言つてのけた。八十になつた母はそんな人になつていた。原稿なしには本にできない、印刷屋は当然のことを言つた。

私がたまたま母を訪ねたら、母はいましゃべることを原稿にしてと言ひ出した。私は日程くつてみた。母から話をきける日としてはきょうだけしかなく、きょうがその日であつた。妹二人、吉内の弟と私の四人が並んで母をテープレコーダーの前にすわらせ、母にしゃべらせた。暑い。汗びっしょり。扇風機はまわり氷水と西瓜をたべる。

八月十一日

朝早く小樽に向かう。西脇巽君の父の還暦祝に出席するために。たどりついた西脇家の人たちは、小説にでもしてみたいほどの善人ばかりである。

八月二十六日

人はみな寝しずまりて、われひとりきょう見し患者の治し方をあつき本のなかにさぐりみる。

あさの二時電話あり。受話器のなかの声、往診をもとむるにいき切つてあり。医師になりしことをうらみてもみる。

一九六八年（五八歳）

八月二十五日

生れてはじめて医学会のシンポジウムで演説する。しっかりと足ふみしめて檀上へのぼる。問題飲酒者をつくつたのは誰であり、何であつたかと胸をしぼつて話しかける。

十月十七日

入院患者が多くそれに応ずることができないでいる。このもどかしさ、この病院のせまさ。

十一月三十日

母は私と語りたのである。

母を中心に二人の孫と私たちの五人が夕食の膳の座につく。箸をにぎつたまま母は私

に語り出した。吉内の家を守るにかかった母の苦勞を。この話かけのためにまがった腰をした母がトラックにゆられてやってきたのではなかろうか。

死んだ父のことで苦勞したこと、曾祖父のことなど母はたべずにしゃべる。冷えないうちにと妻がせがんでも、母はたべることよりしゃべることが主であった。貧乏したこと、叔父の背信のことなど、母は胸のなか一杯を語り出す。

こうした母のたつてのねだりもあり、母のいいたいことすべてをテープにとった私でもあった。それなのに母にとってはもっともっとしゃべっておきたいのであろう。

この母の年老いてからのいいのこしにも近いものに私は感謝している。

血みどろに働いて私を大学に学ばせた母たちの苦勞には彼女はふれて来ないのである。そのむかし私が共産党に入り、刑務所にぶちこまれたときの仰天にふれて来ないのである。

妻についてはほめたたえることはあっても悪口もくどきも言わない母である。夕食がおわってから妻と二人の孫と私でトランプ遊びをしたが母は身体をのり出して見てくれた。

いつもは二人よりいらないわが家に五人でねたら、家のなか一杯あたたかかった。